

平成19年11月の解説（府県天気予報）

【11月の天候状況】

上旬は、高気圧に覆われて晴れの日が多くなりましたが、旬半ばには日本の南海上を東へ進んだ低気圧の影響で東日本、西日本では雨が降りました。一方、沖縄・奄美地方では前線の影響で雨の日が続きました。中旬は旬はじめに低気圧がサハリン付近を通過したため北日本、東日本で雨や雪が降りました。その後は下旬前半まで冬型の気圧配置が多くなり、日本海側の地方と北日本では雨や雪の日が、太平洋側の地方では晴れの日が多くなりました。下旬の後半は日本の南海上を東へ進んだ低気圧や前線の影響でほぼ全国的に曇りの日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、北日本、東日本日本海側、西日本で多く、東日本太平洋側では平年並、沖縄・奄美ではかなり少なくなりました。降水量は北日本太平洋側と沖縄・奄美で平年並のほかは、ほぼ全国的に平年より少なくなりました。気温は全国的に平年並でした。

【11月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が88%で例年（注）より4ポイント高く、明後日予報が85%で例年より5ポイント高くなりました。地方毎の適中率では、明日予報は四国、九州北部、九州南部地方で例年より8から11ポイント高くなりました。明後日予報は関東甲信、中国、九州北部、九州南部、沖縄地方で例年より6から9ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は例年に比べて近畿地方で0.4小さく、全国平均は0.2 小さい1.5 でした。また、最低気温の予報誤差は、北海道、東北地方で例年より0.3 小さく、全国平均は例年と同じ1.6 でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【11月の天気予報から】

11月5日から6日にかけて、西日本、東日本の広い範囲で雨が降り、関東地方も南部を中心にほぼ全域で雨となりました。東京地方の天気予報では3日発表の予報までは5日、6日とも雨が降ると予報していましたが、4日夕方発表した明日予報では5日の天気を「くもり 昼前まで時々晴れ」と予報しました。これは5日から6日にかけて、前線が日本の

南海上を東へ進むために西日本と東日本で雨が降ると予想したものの、東京地方に近づいて雨が降り出すのは6日の0時過ぎと判断したためです。

図1は4日21時の観測資料をもとに24時間後の5日21時を予想した地上天気図で、図2は5日21時の実際の地上天気図です。実況（図2）では日本の南海上の前線が北へ盛り上がったところ（活動が活発なところ）が予想（図1）よりやや東にあって、前線が予想より早く東へ進みました。このため東京地方では予想より数時間早い5日の21時頃から弱い雨が降り出し6日0時には全域で雨が降りました（図3）。

明日予報は週間天気予報や明後日予報に比べてきめ細かな予報が可能なことから、雨が降る時間帯をより詳しく限定して予想しています。この事例のように雨の降り出しの予想が日付の変わる0時頃の時間帯で数時間ずれると、予報対象日に「雨が降るか降らないか」という点では、それまでの明後日予報や週間天気予報の方が明日予報よりも適切であったということも起こります。

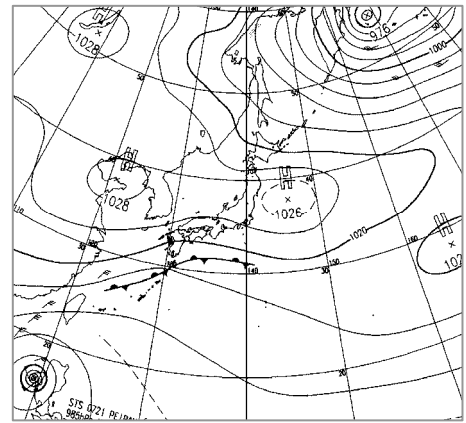


図1 11月4日21時の資料をもとにした
11月5日21時の予想地上天気図

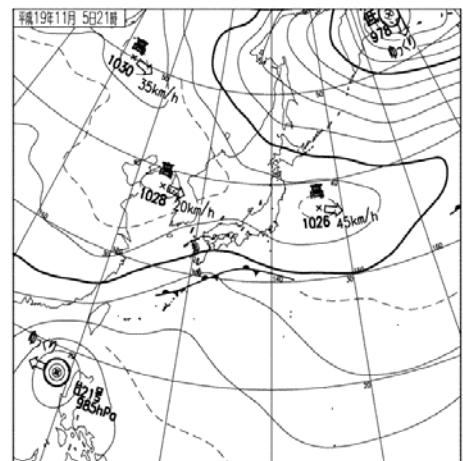


図2 11月5日21時の実況地上天気図

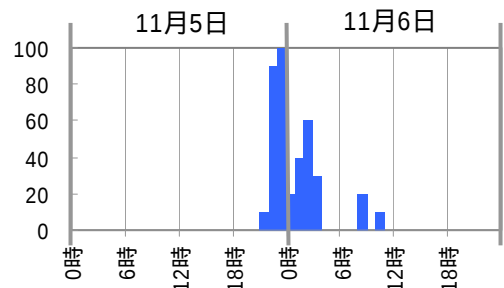


図3 東京地方の全観測点のうち、1mm以上の降水を観測した観測点の割合(%)

【1月の天気予報の利用にあたって】

1月は日本海側の地方で雪や雨の日が続き、太平洋側の地方で晴れの日が続く冬型の気圧配置が多くなりますが、前線や低気圧が日本の南岸を通過する場合などには太平洋側の地方でも雨や雪が降ります。太平洋側の地方など雪が積もることが少ない地方では、数cmの積雪でも歩行者の転倒や車のスリップ事故等多発します。また例年積雪の多い地方でも、大雪が続く場合には通常の雪への対策では間に合わないこともあります。地元の気象台が発表する雪に関する情報や大雪注意報・警報などの防災情報を雪への対策に活用してください。